

夢



「いつかこの木の下で、みんなでお花見をして楽しもう。」
ひとりの少年が思いつき、荒れ果てた荒野に一本の苗木を植えました。
そして、翌年の春、その桜の木に花が咲きました。

あたたかくなると、冬眠していた動物や昆虫たちが、目を覚まします。寒い寒い冬を生き耐えたミツバチもそのひとつで、
春になり目を覚ましました。

クンクン・・・「なんだか甘くてあったかい春の匂いがするぞ。」目を覚ましたミツバチたちが次々とあちこちを飛びまわっています。
すると一匹のミツバチが少年の植えた桜の木に気づき、仲間たちを呼びました。
「おーい！春の匂いはここからするぞー。」するとたくさんのミツバチたちが桜の花に群がり、甘い蜜を吸いました。

ある日、少年は桜の花を見にやって来ました。するとミツバチの大群が少年のまわりを飛び交い、その大群を率いる女王バチが
こう言いました。

「私たちは、食料のない寒い寒い冬を生き耐えました。春になり目を覚まし、最初にありつけるごちそうが桜の蜜です。
桜を植えてくれてありがとう。また秋まで、たくさんの花の蜜を吸い、力をつけ、植物に実をつけるお手伝いをがんばります。」
少年にそう伝えると、大群とともに去って行きました。

しばらく後に、桜の木にたくさんのさくらんぼが実りました。
クンクン・・・「なんだか甘酸っぱい春の匂いがするぞー。」
鳥たちがあちこち飛びまわり、甘酸っぱい匂いがどこからしているのかを探しています。
すると一羽の鳥が少年の植えた桜の木に気がつき、仲間たちを呼びました。
「おーい！甘酸っぱい匂いはここからするぞー。」するとたくさんの鳥達が桜の木にやどり、さくらんぼをついばみました。

ある日、少年がさくらんぼを見にやって来ました。すると鳥達が少年のまわりを飛び交い、一匹の鳥が少年の肩にとまりました。

少年と鳥は目が合い、鳥がこう言いました。

「私たちは、食料のない寒い寒い冬を生き耐えました。あたたかくなり最初にありつけるごちそうが、さくらんぼです。桜を植えてくれてありがとう。

私達は今から各地に飛んで行き、食べたさくらんぼの種を落としてきます。そうすると、来年にはまたあちこちで桜が芽吹いて花が咲き、あなたたち人間を楽しませてくれるでしょう。」

少年にそう伝えると、鳥たちはあちこちに飛んで行きました。

数年後、鳥たちが落としたさくらんぼの種が成長し、花を咲かせ、その木の下で少年はお花見を楽しみました。

いつしか・・・

年月は流れ、荒れ果てた原野は数千本の桜で埋め尽くさんばかりの森となりました。

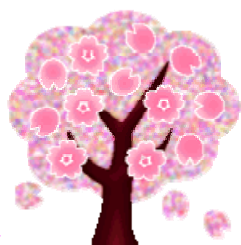
そこは昆虫や鳥たちの憩いの場所となり、桜の花の時期には沢山の人が花見に訪れるようになりました。

家族でお花見に来ていた子供がこんな事を言いました。

「こんなに沢山の桜の木をいったい誰が植えたんだろう？」

近くで一人お花見に来ていた老人が、ゆっくりと振り返り穏やかに微笑みました。

あなたの近くにある桜の木にも、もしかするとこんな物語があるのかもしれないね。私たちNPO法人日本蜜蜂大学はこのような、日本蜜蜂にとっても次世代の子ども達にとっても、勿論今を生き抜く私達にとっても、共に楽しめる環境を創造していきます。



<THE END>

